琉球大学学術リポジトリ

［調査資料］ハワイ大学ホーレー文庫に見る琉球関係漢籍資料

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-07-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上里, 賢一, Uezato, Kenichi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1212

【調査資料】

ハワイ大学ホーレー文庫に見る琉球関係漢籍資料

上里賢一

琉球大学付属図書館の郷土資料室・仲原善忠文庫中に「ホーレー文庫」の複製本が収められている。全体で５７件、それほど数は多くない。その中に漢詩文関係の資料が１１件ある。その内容は次の通りである。程順則『雪堂燕遊草』、阮宣詔他『琉球詩課』（４巻）、牧野　履『琉球百韻』林世功・林世忠『琉球詩録』、鄭元偉他『東遊草』、高崎義男『琉球竹枝』、杜三策『杜天使冊封琉球真記奇観』、編纂者不明『琉球詠詩』、編纂者不明『琉球人詞歌集』、楊文鳳・石塚崔高『琉球筆譚』、編纂者不明「冊封使渡来の時の正（副）使及び従客と琉球詩人との唱和（詩）」。

比嘉春潮氏によれば、この複製は当時ホーレー文庫で研究中の仲宗根政善先生によってなされたものである。「ハワイ大学の東西文化センターで研究中の仲宗根政善教授からの最近の来信によると、ホーレー文庫の貴重な史料をゼロックスで複写して琉大に送ってくれることになったとのことである。（中略）複写を琉大に贈るということは仲宗根教授とハワイ大の阪巻博士との間に、かねてから話があったが、費用の調達や複写設備の関係で、そのままになっていた。今度それが実現するようになったのは沖縄における研究者のため、まことに喜ばしいことである」（「一九六四年の初夢 ―― 沖縄文献の収集運動提言 ―― 」『比嘉春潮全集』第三巻所収 沖縄タイムス １９７１年）

ホーレー文庫は「点数にして９３６点、冊数にして約２０００冊」（「ハワイ大学の琉球研究資料」崎原正子『季刊沖縄』創刊号　那覇出版　昭和５４年）といわれる。この中に琉球関係図書は１７７件ある（横山学「フランク・ホーレーと琉球研究」『琉球・沖縄 ― その歴史と日本史像』地方史研究協議会編 雄山閣 昭和６２年参照）。琉球大学の複製本は１７７件の３割程度に過ぎない。

沖縄関係の研究者は、ホーレー文庫の開設当初から、ずいぶんこの文庫の恩恵に浴してきた。整理に当たった比嘉春潮、仲原善忠両氏をはじめ、仲宗根政善教授らの他多くの研究者が文献調査や研究のため訪れている。

その結果現在では、法政大学沖縄文化研究所、沖縄県立図書館、沖縄国際大学南島文化研究所等に複製やマイクロフィルムが収められ、沖縄県内の研究者はもちろん日本国内の研究者に利用されている。たいへん便利になったが、原資料に当たりたいと願う者も依然として多い。

ホーレー文庫は、ハワイにおける琉球関係資料の拠点として、内外の多くの研究者の交流を支える接点となってきたが、これからもその貴重な収蔵資料を仲介として、琉球（沖縄）文化研究のセンターとして、また、研究者の交流拠点として、ますます重要性を増していくに違いない。

ところで、ホーレー文庫が、ハワイ大学に渡った経緯については、比嘉春潮の次の言葉に詳しい。「一九六〇年にハワイ大学の歴史の先生で、夏期大学の主任、自分でも琉球文化研究所というのを持っている阪巻駿三博士が来日しました。この人が金五千ドル持ってきて、これで、日本にある沖縄の資料を買いたいと言った。（中略）その時、私に、あんたの文庫売らんかと言うから、私はこれと離れたら生きる甲斐はないから、私もいっしょに買うならそれ売りましょう。私は飯も食べますよ、って笑ったんですよ。そんな話のなかで、仲原善忠君が、ホーレーのところにはたくさん良い沖縄の本があるから、あれに相談したらどうだろう、ホーレーの今の奥さんが沖縄の人で比嘉良

篤さんが良く知っているから、その人に言ってみたら、と言ったんです」（比嘉春潮「沖縄研究の本のことなど」『文学』第36巻第1号　岩波書店　１９６８年　『比嘉春潮全集』第四巻　沖縄タイムス社　１９７１年所収）。

これによると、１９６０年にハワイ大学の阪巻駿三博士が来日されて、沖縄関係資料の収集に当たり、比嘉春潮氏と接触した。その過程で仲原善忠氏を通して、阪巻博士をフランク・ホーレー氏に紹介したことが述べられている。後にハワイ大学でホーレー文庫の整理に当たった比嘉、仲原両氏と、阪巻氏との最初の接触の様子が分かり、興味深いものである。

ところが、６１年初めにホーレー氏が突然他界した。阪巻氏は仲原善忠・比嘉良篤氏の斡旋を得て、ホーレー氏の奥さんと交渉し、ホーレー氏の収集した資料のうち沖縄関係資料については、ハワイの沖縄県人連合会が買い取ることになった。

こうした手をうっておいて「阪巻さんはハワイから飛んで来た。約一万ドルは大学のいろいろなものからかき集めて、東西センターに寄付させた。なんでも図書館費を翌年分の予算までとったということです。ところがそれでも足りない、二万五千ドルという呼び値だから。で、あとの一万ドルを、阪巻さんと、沖縄県人連合会の会長をしておるワーレン・比嘉と二人でこさえて、二万五千ドル、すぐはらってしまったんです。（中略）私は一九六一年から二年間あちらにいっていまして、この本をコピーしてきました。（中略）二万五千ドルというと、一千万円近いものでしょう。琉球大学にも、もちろん知らせたでしょうが、金さえあればホーレー文庫だってみすみすハワイに行くことはなかったんですが、それは、とても二万五千ドルはつくれないですからね。金のせいです」（比嘉春潮「前掲論文」参照）。

ホーレー氏の所蔵していた沖縄関係資料が、海を渡ってハワイに行った経緯が具体的に語られている。もしかしたら琉球大学に入ったかもしれない貴重な資料が、予算の関係でハワイに行くことになった。「金さえあればホーレー文庫だってみすみすハワイに行くことはなかったんですが、それは、とても二万五千ドルはつくれないですからね。金のせいです」という比嘉春潮氏の述懐には、胸中の複雑な思いが隠されているとみるべきだろう。

しかし、ホーレー文庫は阪巻氏という沖縄に対する深い愛着を持った人物と出会って、実に幸運だったと言える。もし、そうでなかったら、ホーレー氏の沖縄関係資料は古書店や古物商の所蔵する所となり、法外な値段が付いて分散してしまったことだろう。本は焚かれることもあるが、このように防虫処理され、大切に書庫に納められて、万人に稗益するのを待つものもある。ホーレー文庫の沖縄関係資料は、こうした幸福に恵まれた好例だという事ができる。ハワイ大学東西文化センターの阪巻コレクション（ホーレー文庫を含む）の沖縄関係資料を前にすると、幸せな境遇にある資料の運命に感慨を覚えずにはいられない。これが、沖縄にあれば、と思わないわけではないが、われわれ沖縄にとっては、第二の故郷とも言われるハワイに、この文庫のある僥幸を喜こばずにはいられない。

阪巻氏と沖縄県人連合会の出資で、ハワイに渡った資料は、その収集の段階から関係のあった比嘉春潮、仲原善忠両氏によって整理されることになる。

「一九六一年の四月の末、私はハワイに渡った。生まれてはじめての外国行きであった。ハワイ大学に新しくできた東西センターにビジティング・スカラー（客員教授）として仲原君と二人招聘されたのであった。ハワイ大の古参教授で沖縄研究の権威阪巻駿三博士の推薦によるのであった。

五月一日から琉球文化研究所に勤務することになったが、別にきまったことはなく、ただ自由に

沖縄研究を続けていればよいということであった。ちょうど沖縄文献の集積ともいうべきホーレー文庫の全部がこの研究所に蔵されているので、その解説を作ることになった。（中略）廃藩前後の外交関係や置県直後の諸調査書類がかなりあるのにはおどろかされた。これに阪巻博士私蔵のを加えると、ホノルルはまことに沖縄文献の宝庫ともいえるものであった。

ホーレー文庫本の解説は半年ほどでおわり、それからは私たちは自由に好きな本を読むことができた。契約は一年だったので六二年の四月に仲原君はかえったが、わたしは「沖縄文化史」をかくためにさらに一年間とどまることとなった」（比嘉春潮「前掲論文」参照）。

一年間の契約でハワイに招かれて、自由に研究に打ち込めたことが語られている。アメリカの良い所なのだろう、「ホーレー文庫本の解説は半年ほどでおわり、それからは私たちは自由に好きな本を読むことができた」というから、じつに羨ましいかぎりである。

このことについては、比嘉氏といっしょにハワイ大学の東西センターに滞在した仲原善忠氏も、ハワイに渡って一カ月経った頃の６月９日付け『育英会報』で、「われわれは五月一日から研究室に通っています。バスで三十分。九時から四・五時頃まで。今のところホーレー文庫その他の未見の本を貪り読むのが仕事です」と述べている（「ハワイだより」『仲原善忠全集』第四巻　沖縄タイムス　１９７８年参照）。「比嘉春潮氏もますます元気で、二人とも、東京以上に、仕事に、精が出るようになった」（「このごろのハワイ」仲原『前掲書』参照）。「われわれの研究室は大学構内奥の方の、クロフォードホールの二階にあり、リーブラ博士（人類学・ピッツバーグ大教授）と比嘉春潮氏と私（仲原）の三人が同居している。この研究室には京都から運び込まれた、例のフォーレ文庫が山積みされており、今のところこの貴重文献を、むさぼり読むことがなによりの大きな仕事であり、あと二、三カ月はこの文庫から学的滋味を存分に吸収することになろう」（「同前」仲原『前掲書』参照）、というように、ホーレー文庫での研究生活を満喫している。のびやかで自由な雰囲気が十分伝わり、資料の整理や研究というものは、かくありたいものだと思わずにはいられない。時間的にも精神的にも余裕のある楽しい生活だったことを伺わせる内容である。そして、１９６４年からは仲宗根政善琉球大学教授が調査研究のため、同文庫を訪れる。

さて、比嘉、仲原、仲宗根氏らは、貪り読んだ沖縄関係資料に、簡単ではあるが書誌的解説を付けている。これは、ホーレー文庫開設当時の姿をしのばせる大切なものだと思われるが、現在までのところ、彼らが付けた解説はまとまった形では見ることができない。

実際にホーレー文庫の資料を閲覧して驚いたのだが、彼らが付けた解説は、資料の中にはさまれているだけで、はり付けられているものの方が稀である。おそらく、中にはすでに失われたものもあるかも知れない。

限られた時間で、沖縄関係資料の全体をチエックできなかったが、沖縄関係資料の中で漢籍に限って、残っている解説を再現することにした。漢籍すべてに解説が付いているのではないので、解説のないものについては、資料名だけを示すことにする。

琉球大学付属図書館の「郷土資料室」、沖縄国際大学の南東文化研究所、沖縄県立図書館、沖縄県公文書館、那覇市史編纂室をはじめとする市町村の図書館や資料館等が今日のように整えられる以前は、琉球（沖縄）の研究をするために国会図書館、国立公文書館、東京大学、京都大学等に行って資料を見なければならなかった。

現在かなり改善されたとは言え、その状況が完全には克服されることは将来もないだろう。一次資料が、県外の図書館や資料館に保存されているからである。マイクロ・フィルムやコピー等によっ

て現物と変わらぬ状態で見ることが出来るようになっているとはいえ、原本・原資料の持つ魅力は、また格別のものである。特に、書誌学的な研究を必要をする場合、あるいは書誌学そのものが専門である場合、原典・原資料に触れずしては、何も始まらないとも言える。

ハワイ大学のホーレー文庫は、１９６０年代に創設されて以来、海外における琉球（沖縄）関係の資料の第一級の文庫として、学術的に高い評価を得てきた。その価値はおそらく今後も変わることはないだろう。

沖縄の文化に愛着を持った沖縄系移民の子孫が多いハワイにおいて、国内外を通しても第一級の貴重な文献を所蔵するホーレー文庫の役割は、今後ますます広く大きくなるものと思われる。その充実発展を心から願うものである。

【ハワイ大学ホーレー文庫所蔵漢籍】

●この目録は、ホーレー文庫所蔵の漢籍に関するものである。まだ完全なものとは言えないが、代表的なものは網羅している。この中で、ホーレー文庫の整理に当たった比嘉春潮、仲原善忠両氏による解説のあるものは、それを復元し、『　』でしめした。解説の無いものについては、特に重要なもので説明が必要と思われるものに限って、筆者で補ったものもある。その場合は特記事項としたり、そのまま資料の説明としている。また、誰による解説か特定できないものは不明とした。

1　琉球詩課　二巻・一冊（帙入り）　Ryu 990 Rin1.1 HAW575
林世功　林世忠　　木版　　同治十二年（1873）

2　琉球詩課　（帙入り）　木版　道光24(1844)刊　Ryu990　Gen1.1
HAW576の琉球詩課と同じ版
表紙に金則儀　琉球詩課とあり
裏表紙に　多嘉良親雲上　咸豊十一年辛酉三月求　とある。

3　琉球詠詩　一冊（帙入り）　MS　HAW575
尚温王之冊封使、趙文楷、李鼎元、寄塵等を初め、その前後に琉球に来た支那詩人及び琉球の詩人の佳作をあつめてある。編集の年月は不明であるが、鄭元偉、魏学源の作があるから天保十四年（１８４３）以後の編集である。
（中原善忠か――筆者）
〔特記事項〕
扉を開いた本文の最初のページに「林世功」（陰印）「子叙」（陽印）があり、旧蔵者の注記と思われる「首頁有「林世功」「子叙」／両印或　　係林楫録之／詩集」の記事がある。
林世功（陰印）子叙（陽印）の印章は、琉球大学所蔵のホーレー文庫の複写本では確認出来ないものであり、今回の調査で分かったものである。「子叙」は林世功の号である。林世功の所蔵していたことを示すものとして貴重。今までのところ、林世功の蔵書印のある資料の存在はこれ以外には確認できていない。

4　古琉球吟　乾坤二冊（帙入り）　橋本海関著　昭和３年（1928）Ryu990 Has1.1 V.2 C.1

林炳懋の序文によれば大正１４乙丑（１９２５）以前の成稿である。著者について知るところはないが、著者は漢詩人で詩技として本書を著したものであろう。著者は沖縄に遊んだことはないと思われるが、その沖縄に関する知識は主として明治大正時代出版の著書（おもに伊波普猷氏の著書等）より得たものと推される。内容は大体において正しいが、多くの俗説（例へば為朝、平氏の落武者に関するもの）を採用し、中には可なりの誤り（例＊八重山や徳之島の地理的記述、極楽寺のことなど）がある。

序文と跋を書いた林炳懋、評を書いた道安太玄、李葛用以下十余人は恐らくその姓名から推して朝鮮の詩人で著者の詩友で有ろう。その詩に対する評言は過褒といってよいであろう。

〔例＊尚円王を第一尚氏とし〕　（比嘉春潮）

5　琉球遊草　（帙入り）久保天随　昭和８年（1933）　Ryu990
他に２部あり　KUB C.1
C.2
C.3

6　雪堂燕遊草　（帙入り）　程順則　Ryu990
他に１部あり帙入りあり　Tei
C.2

程順則（名護寵文）が中国に使した時に賦した詩章集。林麟？、陳元輔及び後学蔡鐸の序文あり。正徳四年（1714）程順則が慶賀使（家継襲封の為の）に随い、慶賀掌翰史として江戸上りの機会に、瀬尾維賢源三郎が明の陳仁錫の琉球考を附録とし、跋を書いて奎文堂（瀬尾源兵衛)が刊行したもの。

全篇にわたり訓点を施してある。　（比嘉春潮）

7　琉球詩録
琉球詩課　二冊（帙入り）木版　Ｒｙｕ　990
Ｇｅｎ
C.2

琉球詩録（一冊）と琉球詩課（一冊）の帙入り

１、琉球詩録は巻之一阮宣詔、巻之二鄭学楷、巻之三向克秀、巻之四東国興の詩を収む。巻頭は国子監教習孫衣言の序、巻末に助教長白錫の後跋あり。阮、鄭、向、東は道光２０年（1840）の官生でこの詩録は道光24（1844）の刊行。
（詩には孫衣言の評定がついている。）

２、琉球詩課は詩録と同じく四巻で阮、鄭、向、東の詩を収む。
詩録と同じく教習孫衣言の序文ある。道光24（1844）の刊行。

＊詩録は各巻の初め古今體詩とあり、詩課には帖體詩とあるが、その差別については未だ研究していない（比嘉）

＊詩課の巻之二は　１５・１６二枚の落丁がある。

＊別版に阮宣詔字勤院琉球国久米村府人現宮里里之子国子監肄業官生の現官が、この版では見官となり、他にも字体が聊か異うところがあり、別版と思われる。

＊東国興（津波古政正）については、東恩納寵惇尚泰侯実録、喜舎場朝賢の琉球見

聞録、三冤録、河原田盛美の琉球紀行、真境名安興の沖縄教育史要等に紀事あり。
（比嘉春潮）

8　琉球詩課　道治刊本　全（帙入り）木版　　請求番号欠　　ＨＡＷ７３７

巻之一阮宣詔、巻之二鄭学楷、巻之三向克秀、巻之四東国興の詩を収む。巻之一巻頭に国子監教習孫衣言の序がある。阮、鄭、向、東は道光２０年（1840）の官生。この詩課は道光24(1844) の刊行。詩には孫衣言の評定をつけてある。

＊第四巻の終の１５枚目は落丁。その次の助教長白錫の後跋１枚も或は落丁か。

＊中の表綫に単に琉球詩とあるが恐らく課の字の脱か。

＊帙の題箋に道治刊行は道光の誤か。しかし乾嘉（乾隆・嘉慶？）という熟字もあるから道光から同治の間をそういうかも知れない。

（比嘉春潮）

9　琉球詩課　共二冊　（帙入り）　写本　同治十二年（1873）　　HAW537

安次富長昌写

琉球詩録一冊と琉球詩課一冊の帙入り。琉球詩録は巻之一林世功、巻之二林世忠の詩を収む。巻頭に瑞安孫衣言の序があり（此者には刊本の序の外に更に一篇の序が添えてある。）各詩には教習邵武徐幹小勿の評定がつけてある。序文は同治癸酉三月（1873）。

１、琉球詩課は同じく巻之一林世功、巻之二林世忠の詩を収め、教習邵武徐幹小勿の評定が各詩についている。序文はないが、詩録のに帖體詩で別に一編を為すとあるから同年の編と思われる。

＊詩録の内表紙に此書官生林子叙先生所頒者也とあり、林子叙は世功の字。また詩録詩課の巻末に星久保先生、琉球紀晃、友人安次富長昌手記（写）とあり、紀晃は名嘉地紀晃（医師）である。

＊両冊とも表紙は琉球詩課　種徳堂　梁有功（恐らく原本所蔵者）とあるが、上記のように詩録と詩課である。林世功については廃藩関係の本に記事がある。世功と世忠は従兄弟なり。

（比嘉春潮）

１０　東遊艸　共三冊　　木版　　天保１４（1843）　　ＨＡＷ５７８

琉球鄭元偉著　上

琉球魏学賢著　中

琉球尚元魯著　下

１１　東遊艸　　三巻　　木版　　鄭元偉他

詩の本文に朱点あり。上巻欄外に注記（閲読者のメモ）あり。

次の詩には朱の割り注（閲読者による）あり。

覇江発船

　詩亦如碧海安瀾

題櫻島

　故事活用

避暑水雲庵

詩之心意清爽

召入殿中賜宴併看御能途中口占

大感聖朝雨露

召入二丸殿賞苑併賜宴恭紀

昇平天下亦如春

召入磯殿賜宴併賞烟花恭紀

明君在上賢相在／下不聞美人笑

遊福昌寺

得物外情

恭拝文廟

流芳千歳傳名万／世

中秋旅館賞月

異郷夢難結

和小松清猷先生送別原韻

此詩亦有曹植才

館駅起身赴江都

使人憶当時

横井承餞

悲莫悲於生別離

宿川内駅見蔡修書有感

人生一世声名／千歳

賛梅畫

才酷有朱子才／朱子咏蘭句云／坐久不知香在／室擁時見蝶／飛来窓

泊牛深

若使聞之亦有青衫／濕焉

舟中秋十三夜賞月

轉結句誦帯明月之／光化為軽鴎度水飛

望平戸江城

詩亦如畫

泊富岡

好結句

深堀維舟

人在歳晩則感憂／子独愛之何故乎／江城晩豈駐白駒／哉晩字作暁字似可／余後観泊下関詩而知百／八鐘声似歳暮百八／鐘声如此則晩字猶／存之可矣余又於此百八鐘声以下脱非字為改／百八寺鐘出字又為穿似可泊下関余於此疑評深堀維／舟之事違鐘声百八／者即百八寺鐘乎

12　琉館筆譚　帙入り　横17.4　縦24.5センチ　享和3年（1803）　HAW544

楊文鳳（嘉味田親雲上経斎）と薩摩の儒者石塚崔高との筆談。

「楊文鳳は、首里の人、嘉味田親雲上、名高い詩人である。

享和３年（1803、鹿児島の旅館で石塚崔高の訪問を受けた時の対談である。詩人として、日本及び中国人にもよく知られていたことがわかる。尚お沖縄の漢学の学び方にもふれている。』（仲原）

１３　琉球人詩歌集　帙入り　　Ｒｙｕ　　ＨＡＷ５７２
910

各種聯句を集めたもの。

〔分類〕　春　　医院　　画家　　酒肆　　祠
秋　　婚姻　　新居　　旅行　　仕宦　生子　雑　　諷謡

〔内容〕例

大美御殿

宝座　　天開景運韶光麗　　御座　　四海擁熙豊楽世
年轉青陽淑気長　　萬方歓洽太平春

１４　南浦文集　上・中・下三冊　四條寺町校正刊行　寛永乙丑仲秋　未整理

１５　襟帯集　帙入り　二冊　南浦文之著　徳富猪一郎発行　東京民友社　大正７年
ＨＡＷ　６３２
ＲＲＵ　９９０
ｎａｎ
ｖ．２

「内表紙に成簀堂叢書　　櫻泉居士題
此書刊行五百部
第参百参拾五号」とある。

南浦文之の漢詩とその解説がまとめて一冊とし、もう一冊は「南浦文之和尚」という表題がついており、文之の伝記を知るうえでの貴重な資料となっている。

１６　六諭衍義　和解　帙入り　豊川親方（正英）　乾隆５年（１７４０）　木版

『豊川正英（1669～1770）ガ、仮名交リ文ニテ説明シタルモノデアル。正英ノ序ニヨルト、衍義ハ漢文デ、一般ニ解シ難イ点ガアルノデ、衍義ノ中ニ引用サレタ律列及ビ律詩ヲ省略シ、児童走卒ニモ解シ易キヨウ俗解ヲココロミ、程順則ノ志ヲツイダ云々トアリ』（仲原か？）

１７　官刻六諭衍義　帙入り　乾・坤（二冊）　程順則　武江書林，出雲寺和泉掾
他　　享保６年（１７２１）

乾の裏表紙に尾張城士　加藤鐵太郎の墨書あり、所蔵者と思われる。

１８　琉球人学見聞録　帙入り　四巻（四冊）　潘相　汲古閣蔵板　乾隆３３（１７６８）

北京の国子監で琉球からの学生（官生）の教習をしていた潘相の著作。1760年に入監した鄭孝徳、蔡世昌、金型、梁允治らの教育に当たった。官生に直接聞いたり、中国の書籍、資料を活用してまとめている。琉球の官吏制度、刑罰、風俗、書籍、字母、土音、人物伝、芸文等、琉球の広範な情報を網羅している。

１９　圖治要傳　　蔡温　　ＨＡＷ　６３３

内表紙には、圖治要傳／蓑翁片言　とある。

２０　林政八書　　蔡温　　ＨＡＷ　６３６

旧琉球藩　島袋源一郎翻刻　　那覇沖縄郷土協会　昭和９年

２１　御教條　　帙入り　蔡温　　雍正１０年（1732）　　ＨＡＷ　６２３

草・楷書併記。扉裏に「西村　安慶田／西村　安慶田子」とある。

保存状態は良好。

１７３２年に蔡温が立案、豊川正英が執筆した。摂政・三司官の連名で評定所から発布された文書。蔡温の思想を知る上で貴重な資料である。（沖縄タイムス『沖縄大百科事典』参照）。

２２　御教條　　帙入り　蔡温　　雍正１０年　　琉球版　　木版　　ＨＡＷ　６２３

２３　琉球御教條　　帙入り　　ＨＡＷ　６２４

表紙に朱で元廷、裏表紙に伊江００（王子か）・北谷王子とある。

雍正十年壬子十一月十八日　　具志頭親方・美里親方

２４　使琉球録　　帙入り　　陳侃　　嘉靖１３年（1534）　　ＨＡＷ　７９４

（Ｍｉｃ　62　323）

尚清王の冊封使として、１５３４年に渡来した。約４カ月間琉球に滞在し、琉球の調査をした。渡来前に参考にすべき資料が少なくて困った経験から、琉球の真実を伝え、以後の冊封使の基礎となるような記録を残そうとして書かれた『使琉球録』は、以後の冊封使録の鑑となった。

２５　中山紀略　　帙入り　　小野氏校正　　ＨＡＷ　７９５

中山伝信録よりの抜粋（写本）

２６　中山伝信録　　帙入り　　六巻（六冊）　徐葆光　　ＨＡＷ　７８２

（Ｍｉｃ　53－284）

２７　中山伝信録　　帙入り　　六巻（六冊）　徐葆光　　ＨＡＷ　７８４

平安（京都）　明和３（1766）

明和丙戌五月　　平安蘭園蔵板

平安書林西山房　　銭屋善兵衛発行

２８　中山伝信録　　帙入り　　六巻（四冊）　徐葆光　　ＨＡＷ　７８６

江戸　　二友斎蔵版　康熙６０年（1721）

２９　中山伝信録　　六巻（六冊）　徐葆光　　訓点あり　　Ｒｙｕ

薊門先生句讀　　２００

平安蘭園蔵板　　ＨＳＵ

皇都幸町通三條上二丁目　　ｖ．６

橘屋嘉助　　ｃ．６

３０　重刻中山伝信録　　帙入り　（天保版）　　訓点あり　　Ｒｙｕ

２００

天保庚子正月　　ＨＳＵ

星文堂求板　　ｖ．１

平安書林　　石田治兵衛　　ｃ．６

３１　中山伝信録　　㉙に同じ

第一冊の首頁に阪巻駿三の蔵書印あり。

３２　中山伝信録　　内容と版元いずれも㉗に同じだか、四冊本。

３３　中山伝信録　　六巻（六冊）　徐葆光　　ＨＡＷ　７８３

江戸　　康熙６０年（1721）

３４　中山伝信録物産考　　帙入り　　巻の二（地）　　ＨＡＷ 666－1

田村　登　　輯

巻の一（天）を欠く

３５　殊域周咨録　　帙入り　　二十四巻（八冊）　嘉禾巌

万暦１１（1583）

北京故宮博物院図書館　　民国１９（1930）

『ｎｏ．１　朝鮮、２、３日本、４琉球、５、６安南、

内容　支那周辺の国々の地理、歴史、冊封、官生、貢等の解説である。叙述は簡単であるが、当時の東南アジアの鳥瞰図としては有益である」（不明）。